

公開講座[セクシュアル・マイノリティ(LGBT)と学校] [終了いたしました]

セクシュアル・マイノリティ(LGBT)と学校

— セクシュアル・マイノリティの視点から学校教育を考える—

主催：東京学芸大学国際教育センター

※情報が古い場合がありますので、ページの更新をお願い致します

今日の学校は様々な教育ニーズを持っています。それはマジョリティ側からのニーズだけでなく、マイノリティの立場ある多様な子どもたちからのニーズも重要な要素です。

この公開講座は、本学教職大学院の授業科目「現代的教育ニーズへの対応1」の一環として行うもので、講義の受講者だけでなく、学内関係者にも扉を開き、セクシュアル・マイノリティの教育に関心のある方と一緒に考えることを期して開催するものです。

学内関係者のご来場をお待ちしております。

なお、受講希望者は、下記の要領によりあらかじめ申し込みをお願いします。

担当：国際教育センター 吉谷武志（「現代教育ニーズへの対応1」担当者）

協力：NPO 法人「共生社会をつくる」セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク

公開講座の概要(予定)

第一部 セクシュアル・マイノリティとは(LGBTに関する基礎講座)

Q&A・意見交換

第二部 LGBTを取り巻く社会状況

1)最新の社会動向から(国際的な動きと日本社会)

2)「よりそいホットラインへの相談事例から：40万コールと学校での状況」

3)研究事例紹介：教員6000人へのLGBT意識調査から

Q&Aと意見交換

期 日 : 2014 年 5 月 8 日(木) 16:30 ~ 19:00

場 所 : 合同棟 1 階 大教室

対象者 : 本学の学生、教員、事務職員

定 員 : 70 人(定員に達した時点で締め切らせていただきます。)

申込期限: 2014 年 4 月 30 日

申し込み方法:

E メールにて、「セクマイ講演会申し込み」と題して、

申込者の①氏名、②所属(学年、所属部署、講座等)を記入して、下記のアドレス宛申し込んでください。

参加承認:メールに対して参加可能かどうかを返信させていただきます。必ず返信メールをご確認ください。

E メール宛先: tyosiedu★u-gakugei.ac.jp/(★)を@に変えてお送りください

問い合わせ先: 上記アドレスまでどうぞ。

平成 26 年度 第 1 回 JSL 研修 [終了いたしました]

※情報が古い場合がありますので、ページの更新をお願い致します

第 1 回研修会について

第 1 回研修会は、「今年度の日本語学級・指導を軌道に乗せる」ために、情報を共有し、課題の解決の方法を探ることを目指します。今年度は、次の 3 つのグループを設けました。

① 初めて外国人児童生徒を担当する方のためのグループ

このグループは、「初めて JSL 児童生徒に関わる教員」を対象にしています。JSL 児童生徒 教育の基礎となる情報、理論と日本語学級担当者の役割についての講義のあと、少人数のグループでのディスカッションを行います。分科会では、経験豊かな講師を交えたディスカッションを通して、参加者が抱える課題への対応の方法を探っていきます。

② すでに外国人児童生徒の教育に携わっている方のグループ

日本語学級を担当する先生が1校に複数いることは少なく、相談相手がいないという話を聞きます。現在の課題を持ち寄り、一緒に考えましょう。ぜひ、研修会の場を活用してネットワークを作ってください。

③ 管理職や指導主事の先生方のグループ

外国人児童生徒教育で、こうした先生方の役割はたいへん重要です。しかしなかなか、他の学校や地域の様子を知る機会はありません。「特別の教育課程」の導入など新たな動きもあります。情報を得る場、情報交換の場としてご活用ください。

【第1回研修会のご案内】

- 日時：平成26年5月10日(土) 10:00～16:30
- 会場：東京学芸大学 (小金井市貫井北町4-1-1)
- 参加費：無料
- 申込方法：メール([@c-event★u-gakugei.ac.jp/\(★\)](mailto:c-event★u-gakugei.ac.jp/(★)))を@に変えてお送りください)またはファクス(042-329-7722)で、東京学芸大学国際教育センター事務室宛に申込用紙をお送りください。
- 申し込み用紙: [H26JSL①申込用紙.docx](#)
- 申込締め切り：5月1日(木)

分科会編成の都合上、できるだけ、5月1日(木)までにお申し込みください。その後はメール、お電話でお問い合わせください。

お問い合わせ先: 東京学芸大学国際教育センター 事務室

Tel. 042-329-7727

メール [@c-event★u-gakugei.ac.jp/\(★\)](mailto:c-event★u-gakugei.ac.jp/(★))を@に変えてお送りください

☆ 1回研修では、「JSLカリキュラム」を直接扱うことはいたしません。ぜひ、第2回研修会にご参加ください。

◆ プログラム ◆

全体進行: 榊原 知美(東京学芸大学国際教育センター)

10:00 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:05 はじめに 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

10:25 講義1 「学齡期の子どもの第二言語習得」

松井 智子(東京学芸大学国際教育センター)

11:10 講義2 「外国人児童生徒教育の現状と課題」

吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター)

11:55 質疑応答

12:10 分科会講師紹介・事務連絡

(12:20～13:20 昼食)

13:20 講義3 「日本語学級担当者の役割」

西村 綾子 (福岡市立 城浜小学校)

(13:50～14:00 休憩・移動)

14:00 分科会

コーディネーター(予定):市川 昭彦 (大泉町立 北小学校)

今澤 悌 (甲府市立 新田小学校)

大菅 佐妃子(京都市教育委員会)

小川 郁子 (北区立 稲付中学校)

西村 綾子 (福岡市立 城浜小学校)

濱村 久美 (大田区立 蒲田小学校)

水島 洋子 (浜松市立 江南中学校)

16:15 全体会

16:30 閉会

第35回 海外子女教育セミナー [終了いたしました]

「海外子女教育の未来を作るー児童生徒の変容にあってー」

※情報が古い場合がありますので、ページの更新をお願い致します

今日、在外教育施設に学ぶ児童生徒は急速に変化している。かつては帰国を前提として一定期間、海外に在住する子どもたちが日本の在外教育施設の在籍者の中心を占めていた。しかしながら、こうした子どもたちに加え、現地に定住する日本の家族、国際結婚で海外に生活拠点を定める家族、さらに日本の教育機会を求める現地の家族など、子どもたちの背景は多様なものとなっている。いわば、グローバル化した世界の中の日本の在外教育施設が新たな役割を担い始めていると考えてよいだろう。

本セミナーでは、在籍する子どもたちの変化に応え、よりよい教育を提供するために在外教育施設にはどのような課題があるのか。子どもたちの変容から求められる方向性を探っていきたい。

日時:平成 26 年 5 月 24 日(土) 10:00~16:30

会場:東京学芸大学講義棟(S棟)

対象:在外教育施設に派遣を希望する教員、在外教育施設派遣教員登録者、

海外・帰国児童生徒教育に関心をもつ方

主催:東京学芸大学国際教育センター

■■■プログラム■■■

9:30 開場、受付開始

10:00~10:10 開会

10:10~10:50 講演「海外子女教育の現状と課題」

榎本 剛 氏(文部科学省初等中等教育局国際教育課 課長)

11:00~11:50 講義「変わりゆく児童生徒と日本人学校・補習校の教育課題」

佐藤郡衛 氏(目白大学 学長、東京学芸大学 特命教授)

11:50~13:00 昼食

13:00~16:30 帰国教員による在外教育施設における実践報告、

パネルディスカッション 等

小野江隆 氏(武蔵村山市立第七小学校)

雨宮真一 氏(東京学芸大学附属国際中等教育学校)

北村 聡 氏(所沢市立南陵中学校)

(参加お申し込み方法)

氏名、所属、返信用のメールアドレスもしくは FAX 番号を明記の上、下記宛にメールか FAX にてお申し込みください。また、ご質問、ご不明な点につきましても、下記までお問い合わせください。

(お問い合わせ先)

東京学芸大学国際教育センター事務室

Email c-event(@)u-gakugei.ac.jp ※(@)を@に置き換えてください

FAX 042-329-7722

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 TEL 042-329-7727

平成 26 年度 第 2 回 JSL 研修 [終了いたしました]

今年度、国際教育センターでは以下の予定で授業づくりに焦点を当てた研修を実施いたします。

- 第 2 回 JSL 研修会 : 6 月 28 日(土) 10:00~16:30
- 第 3 回 JSL 研修会 : 10 月 11 日(土) 10:00~16:30

第 2 回では、文部科学省が開発した JSL カリキュラムについて、講義を通してその基本的な考え方を、講師の指導による授業づくり分科会を通して授業の組み立て方を学びます。ぜひご参加ください。

受講者のみなさまには、第 2 回研修で得た知識を基に、ご自身の教室で、子どもに合わせた実践をしていただき、第 3 回研修会ではその報告をお願いいたします。「やってみただけだと上手いかなかったこと」

「まだ腑に落ちないこと」を持ち寄り、講師や他の参加者とディスカッションをしながらよりよい実践を目指して行きましょう。

【昨年度参加者の声】

「授業づくり」の研修(第2回、第3回)は連続して受講されることをお勧めいたします。

【第2回研修会のご案内】

- 日 時 : 平成 25 年 6 月 28 日(土) 10:00 ~ 16:30
- 会 場 : 東京学芸大学 (小金井市貫井北町4-1-1)
- 参 加 費: 無料
- 申込方法: メール(下記参照)またはファクス(042-329-7722)で、東京学芸大学国際教育センター事務室宛に申込用紙をお送りください。

申込用紙([H26JSL②申込用紙.docx](#))はこちらからもダウンロードできます。

- 申込締め切り : 6月15日(日)

分科会編成の都合上、できるだけ、6月15日(日)までにお申し込みください。その後はメール、お電話でお問い合わせください。

- お問い合わせ先: 東京学芸大学国際教育センター 事務室

Tel. 042-329-7727

メール c-event☆u-gakugei.ac.jp ☆を@に変えてお送りください。

☆ プログラムは順次お知らせいたします。

☆ 第2回は**参加者が全員**で授業を作ってみる研修会です。基本的に、分科会への「オブザーバーとしての参加(話を聞くだけ)」はお受けしておりませんのでご了承ください。

☆ 授業づくりは日本語で指導することを前提に行います。

平成 26 年度 JSL サテライトセミナー・イン京都 [終了いたしました] 2014.7/31 開催

平成 26 年度 JSL サテライトセミナー・イン九州[終了いたしました] 2014.8/8 開催

平成 26 年度 JSL サテライトセミナー・イン九州[終了いたしました] 2014.8/9 開催

第 15 回外国人児童生徒教育フォーラム[終了いたしました]

第 15 回外国人児童生徒教育フォーラム

「特別の教育課程による日本語指導」を考える2

～各地の「はじめの一步」、そしてこれから～

東京学芸大学国際教育センターでは、平成 26 年 10 月 4 日(土)に第 15 回外国人児童生徒教育フォーラムを開催いたします。

平成 26 年度から「特別の教育課程」による日本語指導が可能になりました。皆様の地域、学校ではどのような取組みをなさっているのでしょうか。

昨年度のフォーラムは「特別の教育課程による日本語指導」について知り、実施上の課題を考えるという目的で開催されました。「特別の教育課程による日本語指導」の意義については会場で共有されましたが、実施状況についての継続的な情報提供・情報交換が必要との意見がありました。

こうした声を受け、今年度のフォーラムでは再度「特別の教育課程による日本語指導」を取り上げます。導入初年度の実施状況についての説明を文部科学省から、また集住地域(鈴鹿市)、中規模在籍地域(甲府市)、散在地域(山形市)の具体的な動きを担当者からうかがいます。さらに、東京学芸大学齋藤ひろみ先生に「子どもたちのライフコースを支えることばの教育ー日本語指導の「特別の教育課程」化に期待されること」というタイトルでご講演いただきます。

「特別の教育課程による日本語指導」は学校における外国人児童生徒支援の大きな転換点になると考えます。初年度の動きを元に、改めて「特別の教育課程による日本語指導」の意義と体制づくりについて一緒に考えてみませんか。学校や地域での取り組みについてもぜひご発言ください。

プログラムの詳細は、センターホームページで順次お知らせいたします。

関心をお持ちの皆様のご参加、おまちしております。

日時 : 2014 年 10 月 4 日(土)10:00~16:30

場所 : 中野サンプラザ 8 階研修室2

定員 : 60 名

お申し込み: 東京学芸大学国際教育センター事務室

メール c-event@u-gakugei.ac.jp Fax.042-329-7722

お問い合わせ: 東京学芸大学国際教育センター事務室 042-329-7727

「特別の教育課程による日本語指導」を考える2

～各地の「はじめの一步」、そしてこれから～

日時 : 2014 年 10 月 4 日(土)10:00~16:30

場所 : 中野サンプラザ 8 階研修室

◆ プログラム ◆

10:00 開会

10:00~10:05 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:05~10:15 趣旨説明 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

10:15~10:35 「特別の教育課程による日本語指導」の実施状況について

村松 好子(文部科学省初等中等教育局国際教育課)

10:45~12:00 講演: 子どもたちのライフコースを支えることばの教育

ー日本語指導の「特別の教育課程」化に期待されることー

齋藤 ひろみ(東京学芸大学教育学部)

13:00~15:45 「特別の教育課程による日本語指導」の各地の取り組みから

- 各地の報告 鈴鹿市の取り組み 中川 智子(鈴鹿市教育委員会)

甲府市の取り組み 竜澤 規之(甲府市教育委員会)

山形市の取り組み 内海 由美子(山形大学基盤教育院)

長藤 節子(山形こども日本語サポートネット)

- パネルディスカッション

パネリスト:中川 智子(鈴鹿市教育委員会)

竜澤 規之(甲府市教育委員会)

内海 由美子(山形大学基盤教育院)

長藤 節子(山形こども日本語サポートネット)

ディスカッサント:吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター)

15:45~16:30 全体討議

16:30 閉会

平成 26 年度 第 3 回 JSL 研修 [終了いたしました]

平成 26 年度第 3 回 JSL 研修会

みんなで共有しようーよりよい実践に向けてー

東京学芸大学国際教育センターでは今年度 2 回の JSL 研修を実施いたしました。その中で繰り返し言及されていたのが、日本国内にいる JSL 児童生徒の多様さと、子どもたちの実態に合わせて授業を組み立てる重要性です。JSL 児童生徒教育で大切なのは、知識を基に実際に授業を作り実践してみること、そしてそれを振り返ってみることだと考えます。

そこで、第3回 JSL 研修会は、参加者が持ち寄った実践、指導案、教材をもとに、講師を交えてディスカッションをする形の研修を企画しました。お互いの実践から良いところ、取り入れられるところを見つけ、さらによい実践を目指しましょう。

皆様のご参加、お待ちしております。

平成 26 年度 第 3 回 JSL 研修会

通常の JSL 研修会場と異なります。ご注意ください。

日時：平成 26 年 10 月 11 日(土) 10:00 ～ 16:30

場所：東京学芸大学 合同棟 1 階 大教室

(国際教育センターのある建物です [[アクセス](#)])

参加費：無料

内容：全体会 実践報告(JSL カリキュラムに基づく取り出し授業(算数)、平成 25 年度第 2 回

JSL 研修会作成指導案の実践のご報告をいただきます)

分科会 参加者による報告・ディスカッション・講師からのアドバイス

定員：30 名

お問い合わせ：東京学芸大学国際教育センター事務室 042-329-7727

申し込みフォーム：[H26JSL③申し込みフォーム](#)

第 3 回 JSL 研修会 お申し込み方法

第 3 回研修会は、当日ご紹介いただく内容によってグループの編成を行いますので申込用紙および「報告の概要」をご記入の上、メールまたは Fax. で東京学芸大学国際教育センター事務室にお申し込みください。

メール：c-event@u-gakugei.ac.jp Fax.:042-329-7722

申し込みの締め切りは 10 月 2 日(木)とさせていただきます。

なお、概要をご記入いただいていないお申し込みはお受けできません。また、第 3 回研修会は参加者全員が何らかの報告をすることになっております。基本的にオブザーバーとしての参加(話を聞くだけ)はお受けしておりません。あらかじめご了承ください。

【お申し込みフォームの記入について】

Ⅰ 対象とした子ども

年齢が異なる複数の子どもたちを対象とした授業の場合は「その他」をお選びください。特定の子どもに焦点を当てて授業等を計画した場合はその子どもの学年で結構です。

Ⅰ 授業

「日本語指導」が中心か、特定の教科内容を意識したものか、でお選びください。

Ⅰ ご報告の内容

実施した授業の様子、これから行う授業の指導案、教材などについて、当日分科会でお話いただく内容を簡単にお書きください。「普段こんな授業をしているが、もう少し子どもが自主的に活動できる授業をしたい」「こんなに工夫しているのに子どもがやる気にならない」など「一言」コメントがありましたらぜひお書き添えください。

「今回初めて参加したい」という方、現在実践の場をお持ちでない方もご参加いただけます。過去の授業事例や教材、子ども像を想定して作成した指導案のほか、ご自身が見た JSL 児童生徒に対する授業のご報告でも構いません。「どのような子どもを対象にした授業で、どのような工夫がみられたか。自分だったらどんな展開にしたか」などをお話してください。

【当日までの流れ】

お申し込み時にいただいた「報告の概要」は、分科会ごとにまとめ、当日の資料といたします。

それ以外の資料等につきましては、お申し込み受付後にご案内いたします。確実に連絡が可能なメールアドレスまたはファックス番号をお忘れなくご記入ください。

◆ プログラム ◆

- 10:00 開会 全体進行：見世 千賀子(東京学芸大学国際教育センター)
- 10:00～10:05 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)
- 10:05～10:15 趣旨説明 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)
- 10:15～11:50 授業実践報告「JSL 研修会から教室へ」
報 告：川尻 年輝(小谷町立 小谷小学校)
市川 昭彦(大泉町立 北小学校)
コメント：榊原 知美(東京学芸大学国際教育センター)
- 11:50～12:00 分科会講師紹介
- 12:00～13:00 昼食
- 13:00～16:00 分科会 実践報告その他
講師(予定)：市川 昭彦 (大泉町立 北小学校)
- 今澤 悌 (甲府市立 新田小学校)
- 小川 郁子 (北区立 稲付中学校)

近田 由紀子(前浜松市立瑞穂小学校)

濱村 久美 (新宿区立 大久保小学校)

大菅 佐妃子(京都市教育委員会)

16:00～16:10 休憩 & 移動

16:10～16:30 全体会

16:30 閉会

第6回 多文化共生フォーラム[終了いたしました]

第6回 多文化共生フォーラム

「多文化共生社会の市民性教育を考える」

東京学芸大学国際教育センター 主催

本フォーラムは、多文化化が進行する日本の学校の現状に対し、「多文化共生」という課題を正面に据えて、教育における対応やあり方について議論することを目的としています。

今回のフォーラムでは、多文化共生社会に向けた市民性教育をどのように構想し、実践していけばいいのか、考えていきたいと思えます。

日本においても、多文化共生に向けた様々な取り組みが行われています。学校内外におけるそうした活動が、市民性教育の観点から、だれにとって、どのような意味があるのか、検討したいと思えます。そして、地域の取り組みから学び、日本の現状と問題点を踏まえた上で、自らの手で多文化共生社会を創造し、それを担う市民の育成に向けて、いま何ができるのか、そして、今後何をすべきなのか、課題を共有したいと思えます。

ご関心をお持ちの方々にご参加いただけましたら幸いです。

■ 日時： 2015年1月31日(土)13:00～17:00

■ 場所： 東京学芸大学 S 講義棟3階 303 教室(小金井市貫井北町4-1-1)

・JR 中央線 武蔵小金井駅・北口より

【京王バス】[5番バス停]「小平団地」行に乗車、約10分。

「学芸大正門」下車、徒歩約3分(駅から徒歩の場合は約20分)

- 定員： 80名(申し込み受付順)
- 参加申し込み・問い合わせ先：

東京学芸大学国際教育センター 事務室

TEL 042-329-7727 FAX 042-329-7722

メール c-event@u-gakugei.ac.jp

- 参加費： 無料
- URL : <http://crie.u-gakugei.ac.jp/>

* 件名は「第6回多文化共生フォーラム申し込み」とし、本文に氏名・所属をご記入ください。

◆ プログラム ◆

12:30 受付開始

13:00 開会の辞 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

13:05 趣旨説明 見世千賀子(東京学芸大学国際教育センター・准教授)

13:20

報告

「多文化共生と市民性教育－静岡県西部地域における実践からみえてくるもの－」

池上 重弘(静岡文化芸術大学教授)

「外国につながる生徒への支援と多文化共生への取り組み」

高橋 清樹(神奈川県立相模原青陵高等学校教諭)

「人権教育と市民性教育」

若槻 健 (関西大学准教授)

パネルディスカッション

ディスカッサント 佐久間 孝正(東京女子大学名誉教授)

および 登壇者全員

17:00 閉会

第8回 国際教育センターフォーラム [終了いたしました]

第8回 国際教育センターフォーラム

多言語・多文化環境で育つ子どもの健全な言語発達のために

—就学前・就学初期に大人ができること・すべきことはなにか—

多言語・多文化環境で育つ子どもたちの言語獲得には、周囲の大人の姿勢や期待、そしてそれに基づくさまざまな決断が大きく影響します。家庭において、乳幼児期に親が自分の母語を使って子どもとコミュニケーションをとることは、子どもが自分や相手の気持ちを理解し、表現できるようになるために不可欠です。反対に、幼児期に母語でのコミュニケーションの経験が十分ないと、子どもは就学後も感情をコントロールすることや集中することが難しくなり、学習の構えがうまく育たないことがあります。さらに教科学習を支える学習言語の発達に遅れが出る可能性もあります。

そこで今回のフォーラムでは、まずこれまでの研究をとおして見えてきた多言語・多文化環境で育つ子供たちの言語発達の特徴や課題を共有したいと思います。そしてそれを題材にして、子どもたちの就学レディネス、学校での学習に対する姿勢と成果、そして学校やコミュニティでの豊かな社会生活などを支えるために、周囲の大人ができること・すべきことを皆さんと考えていきたいと思っています。

ご関心をお持ちの方々にご参加いただけましたら幸いです。

■日時： 2015年3月7日(土)13:00-16:40

■場所： 中野サンプラザ 7F 研修室 10

※定員に達しました

資料をご希望の方にはフォーラム終了後に資料を着払いでお送り致します。

※2015年3月6日(金)までに下記までご連絡ください

■定員：~~95名~~(申し込み受け付け順)

■申し込み締切:2015年3月4日(水)

■お申し込み・お問い合わせ先:

東京学芸大学国際教育センター 事務室

TEL :042-329-7727 FAX: 042-329-7722

メール : c-event@u-gakugei.ac.jp

*件名「第8回国際教育センターフォーラム申込み」とし、本文に氏名・所属をご記入ください。

■チラシ: [第8回国際教育センターフォーラム.pdf](#)

■ポスター: [第8回国際教育センターフォーラム\(ポスター\).pdf](#)

◆ プログラム ◆

- 13:00 開会
- 13:00 開会の辞 池田榮一 (東京学芸大学国際教育センター長)
- 13:10 趣旨説明 松井智子 (東京学芸大学国際教育センター・教授)
- 13:25～13:50 「日本で生まれた言語的マイノリティ幼児の言語と社会性の発達」
松井智子 (東京学芸大学国際教育センター・教授)
- 13:55～14:20 「北米都市部における多言語・多文化児童の言語発達」
権藤桂子 (共立女子大学・教授)
- 14:25～14:50 「多言語・多文化環境での日本人保護者の教育意識と行動」
稲田素子(立教大学・兼任講師)
- 休憩—
- 15:00～15:50 「FIRST THINGS FIRST: 母語・継承語育成の重要性の再確認」
中島和子(トロント大学・名誉教授)
- 15:50～16:10 指定討論 塘 利枝子 (同志社女子大学・教授)
- 16:10～16:40 ディスカッション

報告の概要

「日本で生まれた言語的マイノリティ幼児の言語と社会的スキルの発達」

東京学芸大学 国際教育センター

松井智子

近年、ニューカマー一定住外国人の増加に伴い、日本で生まれたり、生後まもなく日本に移り住んだりする外国人の子どもが増えている。このような子どもたちは、言語発達の最初期から、家庭で使われる親の母語である言葉(継承語)と、社会で使われる日本語(社会言語)との少なくともふたつの異なった言語環境で育つことになる。典型的に、継承語と社会言語の2言語環境で育つ子どもは、比較的早いうちから社会言語を獲得し、就学前には会話ができるくらいの言語能力を身につける一方で、高度な継承語の能力を獲得することが難しくなることが指摘されている。社会言語に関しても、深刻な問題が指摘されている。会話をするための言語能力を獲得しても、就学後に必要となる、概念的により抽象的で、構造的により複雑な学習言語を獲得することが困難な子どもが多いことである。子どもの2言語獲得に関する研究によると、第2言語の学習言語の発達の基盤となるのは高度な第1言語の獲得であるとされており、高度な継承語の獲得が達成されなければ、社会言語の高度な発達が望めない可能性が高い(Cummins, 1979)。

一方モノリンガル児を対象としたこれまでの研究は、健全な母語の獲得が、学習や思考能力を支えるばかりでなく、自己や他者の心を理解する能力や、社会的な場面での確な判断や行動をする力、すなわち社会的スキルの発達を促進することを明らかにしている。逆に、何らかの理由で乳幼児期の母語でのコミュニケーションが十分にとれなかった子どもは、のちに自己や他者の心を理解することが困難となる可能性が高いこともわかっている。このような研究結果は、日本で生まれた外国人の子どもたちの中にも、言語の遅れとともに、社会的スキルの発達にも遅れが見られる子どもがいる可能性を示唆している。

本発表では、就学前の言語と社会的スキルの発達の関係を概観し、継承語と社会言語という2言語環境で生まれ育つ我が国のニューカマー外国人幼児の言語と心の発達について、私たちが実施した調査の結果を材料にして考えてみたい。そして乳幼児期の言葉と心の相補的な発達について理解することから、言語発達とともに社会的スキルの発達を視野に入れた外国人幼児・児童支援のあり方を検討していきたい。

「北米都市部における多言語多文化児童の言語発達」

共立女子大学

権藤桂子

北米都市部の日本語補習校を中心に日英二言語環境下で育つ児童の言語発達の状況を検討した結果をもとに、多言語多文化児童の言語発達の特徴と言語環境の影響について報告する。通常は現地校で英語による教育を受け、週に1日、日本語による教育を受けている5歳から9歳の児童16名に対して、英語と日本語の標準化テストを実施した。ほとんどの家庭では、家庭言語は日本語、社会言語は英語という環境であった。

英語力の評価には、語彙理解力、語彙表出力、文法理解力の標準化テストを実施した。日本語の評価には、語彙理解力と文法理解力の標準化テストを用いた。その結果、英語は、語彙理解、語彙表出、文法理解の3指標ともに対象児の生活年齢レベルであった。家庭ではほぼ日本語であることを考えると、学校や社会が英語環境であることが英語の習得を支えていると推測される。また、語彙理解力と表出力には高い相関があるが、理解力の方が比較的良好な発達を示していた。文法理解力については、生活年齢レベル以上の児童が半数以上いる一方で、文法理解に困難を示す児童も見られ個人差が大きかった。

日本語の語彙理解力は英語に比べ低く、個人差も大きかった。英語語彙理解力との相関もほとんど見られなかった。日本語学習の時間が英語に比べ非常に少ないこと、また、一般的に家庭での日本語語彙は限定的であることから、標準化された語彙テストを使った場合、日本で育っている同年代の児童のレベルに達することは難しいと推測される。しかし、日本語文法については、ほぼ全員が生活年齢レベルに到達していた。このことから、日本語の刺激が限定的な環境にあっても文法の理解力は発達しうる可能性が示唆された。

両言語ともに、語彙力については言語環境の影響を受けやすく、文法理解力については比較的、言語環境からの影響を受けにくいということが示唆された。

「FIRST THINGS FIRST: 母語・継承語育成の重要性の再確認」

中島和子

トロント大学名誉教授

母語とは一番初めに覚えて今でもよく使える、アイデンティティと直結した言語である。継承語は、親の母語であり、子どもが一番初めに覚えた言語であっても、優勢な現地語に押されて、劣位の立場に押しやられる親から子が受け継ごうとする言語である。母語・継承語の重要性は、(a) 民族文化伝承、(b) 子どもの人権、(c) 国の言語資源、(d) 第2言語への転移、(e) 教科学習言語能力・学力への転移など、さまざまな立場から過去40年近くにわたってその重要性が指摘されてきた。グローバル人材の育成が叫ばれる時代を迎え、複数言語のコミュニケーション能力を持った人材の必要性が増すにつれ、海外で育つ日本人児童生徒や、国内の外国人児童生徒・国際家庭児も含めて、日本の教育の構図を見直す必要があり、それにともなって、改めて母語・継承語教育の重要性を再認識することが喫緊の課題となっている。

実際に日本の国内外で、母語・継承語教育がどのぐらい、どのように行われているかというと、現実には非常に厳しい。例えば、文科省が開発した国内の外国人児童生徒のためのマニュアルやガイドラインの中に、母語・継承語の重要性に関する言及はあっても、その育成に関する記述はほとんどなく、日本語習得の過程で母語をどう活用するかに留まり、母語育成そのものの教授法は未発達である。また海外では、現地校と補習授業校という形で2言語を通して1つの学力を育てようとする海外子女教育においても、帰国時に困らない国語力が中心課題となり、複数の言語を同時に育てるといったバイリンガル育成の視点に立った教材も教授法も開発されていない。

上記 (d) と (e) の立場から、最近の研究成果に基づいて、母語・継承語教育の重要性を再確認し、家庭・地域・学校の中でどのようにしたら母語・継承語の育成が可能か、またその重要性に対する認識を広め、高めるための啓蒙運動がどうあるべきかについて検討したい。